

大学生の抑うつ症状と職業未決定尺度の学年別検討

著者	福田 直子 , 朝倉 隆司 , 伊野宮 興志 , 小室 理恵子 , 脇坂 喜代美
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	7
ページ	9-16
発行年	2011-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00000396/

[論文]

大学生の抑うつ症状と職業未決定尺度の学年別検討

福田 直子^{*1}・朝倉 隆司^{*2}・伊野宮 興志^{*3}・小室 理恵子^{*1}・脇坂 喜代美^{*1}

(Accepted December 7, 2010)

Depressive Symptoms and the Vocational Indecision Scale of Undergraduates in Each School Grade

Naoko FUKUDA^{*1}, Takashi ASAKURA^{*2}, Koshi INOMIYA^{*3}, Rieko KOMURO^{*1} and Kiyomi WAKISAKA^{*1}

Abstract: The purpose of this study was to investigate the relationship between depressive symptoms and six subscales of Vocational Indecision Scale in undergraduates of the university. 254 freshmen (the average age was 18.4), 212 sophomores (the average age was 19.4), 255 juniors (the average age was 20.4) and 260 seniors (the average age was 21.4) participated in the present study. Multiple logistic regression analysis showed a significant association of “Confusion” (OR=1.20 in freshmen and sophomores, OR=1.18 in juniors and seniors), “Exploration” (OR=0.99 in freshmen and sophomores) and “Moratorium” (OR=1.11 in juniors and seniors) with depressive symptoms measured by Center for Epidemiologic Studies Depression Scale. These results suggested that depressive symptoms are affected according to increasing of “Confusion” and “Moratorium” and decreasing “Exploration”.

Key words: Depressive symptoms, Center for Epidemiologic Studies Depression Scale, Vocational Indecision Scale, Logistic regression analysis, Undergraduates of the university

第一章 背景と目的

大学は職業人を社会に送り出すことも大切な役割の一つである。大学生自身にとっても職業の選択と決定が大学卒業の大きな目的の一つであるため、職業を決定していく過程で大学生が悩みや不安を持つことは容易に想像される。実際に学生相談の場でも進路相談は常に遭遇する重要なテーマである。しかし、その悩みや不安は様ではない。

これまで職業未決定の背景を探る研究は多くなされ、自我の未確立^{1,2)}、自己効力感^{3,4)}、動機付けとの関連⁵⁾などが検討されてきた。また近年はフリーターやニートの問題も指摘され、大学生の職業意識形成の変化に着目した研究⁶⁾もされてきた。それらの研究の多くは、青年の職業決定・未決定のプロセスや要因を明らかにすることによって、職業未決定の対処法を探ることに主眼が置かれ、そのため職業未決定学生にどのように支援すれば職業を決定していけるのかを探求しているように感じられる。もちろんそれらの支援は重要であるが、一方で、学生の職業決定の過程における精神健康度にも常に留意する必要がある。学生相談

の主訴が進路相談であっても、実は精神健康度の低下に学生自身が苦しんでいる例もしばしば見受けられるからである。精神健康度の低下は、職業決定への取り組みをさらに困難にし、その上、学業や生活にも支障を来たすようになる。そうなるとう度は進学、卒業問題に発展し、その悪循環にさらに学生が苦しむという可能性を含むのである。

以上の観点から、大学生が入学後、学年を経ていく中で、職業未決定の状態がどのように変化するか、また職業未決定のどのような状態が精神健康度と関係するのかを知ることが、大学生のメンタルヘルスの支援に、さらには職業決定の支援にとっても意義深いことと思われる。そこで本研究では、下山が作成した職業未決定尺度¹⁾を用いて、学年別に職業未決状態を調査し、精神健康度の指標の一つである抑うつ状態との関連を検討した。ちなみに抑うつ状態とはうつ状態と同義である。不眠、食欲低下、憂うつ感、気力や体力の低下、楽しさを感じられないなど、うつ病と同じ症状がいくつか同時にみられる状態を指す。

*1 Health Service Center, Tokyo University of Marine Science and Technology, 2-1-6 Etchujima, Koto-ku, Tokyo 135-8533, Japan (東京海洋大学保健管理センター)

*2 Lab. of Health and Social Behavior, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita, Koganei, Tokyo 184-8501, Japan (東京学芸大学教育学部養護教育講座)

*3 Shin-Tokyo Japan Post Health Care Center, Japan Post Holdings Co. Ltd., 2-4-23 Sinsuna, Koto-ku, Tokyo 137-8799, Japan (日本郵政株式会社新東京郵政健康管理センター)

第二章 方法

1. 質問紙調査の時期と対象

2002年4月と2003年4月に旧東京商船大学の入学者を対象として、入学直前の3月下旬から4月上旬にかけて自記式質問紙調査を実施した。質問紙は入学案内に同封して3月下旬に郵送し、記入後に入学関係書類とともに返送させた。さらに本対象者に対し、2年生以降も毎年4月上旬に行う学生健康診断の場で同様の質問紙調査を実施した。健康診断時に質問紙を配布し、待ち時間の間に記入を依頼し、健康診断終了後に回収箱に入れてもらった。いずれも調査目的を学生の健康管理の調査研究と明記した上で、辞退は可能とした。調査は2006年まで行った。

2. 調査内容

米国国立精神衛生研究所で開発されたうつ状態の疫学研究用の自己評価尺度である Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (以下 CES-D) の日本語版⁷⁾ と下山が作成した職業未決定尺度¹⁾ を用いた。

CES-D 日本語版は、その信頼性、妥当性は確認済みで⁷⁾、精神不調のスクリーニングや疫学研究に広く使用されている。質問内容は最近1週間の抑うつ状態に関する20項目で構成され、各質問の状態に当てはまる日数によって4段階に分けられている。その4段階に0～3点を与え、それらを合計し評価する。得点が高いほど、抑うつ症状の程度は高いと考えられる。また、CES-D 得点によってうつ病などの感情障害を最も多い割合で拾い出すことができるのは16点以上であり、従って抑うつ症状の有無のカットオフポイントは15/16点点が妥当とされている⁷⁾。CES-D 得点が16点以上で抑うつ症状あり、15点以下で抑うつ症状なしとする。

職業未決定尺度は、日本の大学生の特徴を考慮して作成され、その信頼性、妥当性は確認されている¹⁾。職業に対する気持ちを39項目で質問し、「あてはまる」、「どちらともいえない」、「あてはまらない」の3段階で回答してもらう。3段階の回答に1～3点まで与え、下位尺度ごとに合計する。下位尺度は職業決定という課題に立ち向かう際に示す様々な態度を、以下の6つに分類したものである。

・「未熟」:7項目から成る。職業意識が未熟なため、将来の

見通しがなく、職業選択に取り組めないでいる状態。

- ・「混乱」:8項目から成る。職業決定に直面して不安になり、情緒的に混乱している状態。
- ・「猶予」:7項目から成る。職業決定を猶予して当面のところは職業について考えたくないという状態。
- ・「模索」:6項目から成る。職業決定に向かって積極的に模索している状態。
- ・「安直」:7項目から成る。自らの関心や興味を職業選択に結び付けていこうとする努力をしない安易な職業決定に関する状態。
- ・「決定」:4項目から成る。職業の既決を意味する。

Cronbach の α 信頼性係数は「未熟」が 0.92、「混乱」が 0.89、「猶予」が 0.87、「模索」が 0.82、「安直」が 0.83、「決定」が 0.86 であった。

3. 分析対象と方法

2002年度入学者では、質問紙を回収した人数は1年生115人、2年生168人、3年生133人、4年生133人であった。2003年度入学者では、1年生156人、2年生154人、3年生151人、4年生153人であった。そのうち、有効回答者数とその属性を Table 1 に示した。2002年入学者と2003年入学者をあわせて分析対象者とした。

職業未決定の状態を学年別に比較するため、下位尺度の得点を1～4年生間で Mann-Whitney 検定を行った。検定の多重性を考慮し、有意水準は Bonferroni 法を適用して $0.05/4=0.0125$ とした。

また下山は下位尺度の標準点をそれぞれ算出し、その中で最も高い標準点を持つ下位尺度をその学生の職業未決定タイプとする分類を行っている¹⁾。標準点の最高点によってタイプを決めるので、各下位尺度が僅差の学生の場合、そのタイプのみで特徴付けられない可能性はあるが、先行研究では職業未決定タイプ分類の妥当性は確認されており¹⁾、本調査でもこれを利用したタイプ分けを行った。その類型化の妥当性を検証するために、6つの下位尺度得点を目的変数、職業未決定タイプを説明変数として、職業未決定タイプにより下位尺度得点が異なることを多変量分散分析で検討した。その結果、タイプによる下位尺度得点には有意に違いが見られた ($p<0.001$)。さらにその違いを調べるために、タイプ別に下位尺度得点の平均値を図で表した (Fig. 1)。

Table 1 Attributes of objects in this study

School grade	Age (M ± SD)	Entrance to the university in 2002				Entrance to the university in 2003			
		Sea training		Engineering		Sea training		Engineering	
		Male (%)	Female (%)	Male (%)	Female (%)	Male (%)	Female (%)	Male (%)	Female (%)
1 (n=254)	18.4 ± 0.877	51 (94.4)	3 (5.6)	54 (90.0)	6 (10.0)	58 (95.1)	3 (4.9)	67 (84.8)	12 (15.2)
2 (n=212)	19.4 ± 0.894	50 (92.6)	4 (7.4)	51 (87.9)	7 (12.1)	36 (94.7)	2 (5.3)	49 (79.0)	13 (21.0)
3 (n=255)	20.4 ± 0.870	45 (90.0)	5 (10.0)	66 (89.2)	8 (10.8)	55 (91.7)	5 (8.3)	60 (84.5)	11 (15.5)
4 (n=260)	21.4 ± 0.758	46 (92.0)	4 (8.0)	66 (90.4)	7 (9.6)	56 (93.3)	4 (8.0)	67 (87.0)	10 (13.0)

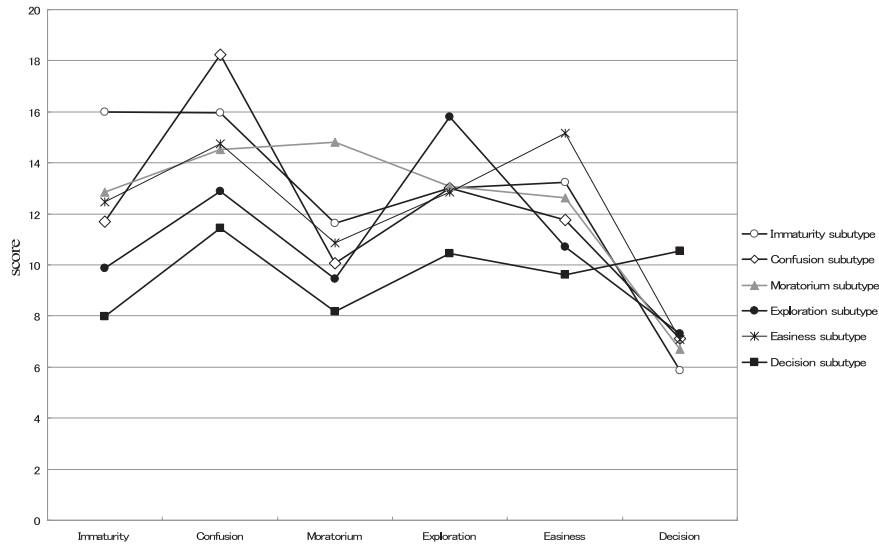


Fig.1 The average subscales scores of Vocational Indecision Scale in six subtype of vocational indecision

Fig. 1に見られるように、各タイプを特徴づけている下位尺度の得点が最も高く、類型化の妥当性という点で全体ではおおむね良好になっていると考えられた。そこで職業未決定タイプの人数の学年別傾向を見るために、職業未決定タイプの人数について χ^2 検定を用いて比較した。

さらに職業未決定尺度の下位尺度得点と抑うつ症状の有無との関連性を調べるために、CES-D 得点のカットオフポイントを用いて抑うつ症状の有無の 2 値に分け、それを目的変数とし、職業未決定下位尺度の得点を説明変数としたロジスティックモデルによる分析を行った。

CES-D のカットオフポイントを用いて 2 値に分け、それを目的変数としたのは、分析の目的が、単に CES-D 得点の高低ではなく、精神疾患の可能性を問題とし、そのリスクを探ることにあるからである。CES-D 得点が 1 点上昇するリスクを知るよりも、うつ病などの感情障害のリスクを知ることの方が、学生相談の場においては有用である。加えて、このように CES-D 得点をカットオフポイントで 2 値に分けて使用する方法は、疫学等の研究ではまれなものではなく、抑うつ症状の関連要因を知るには有効な方法として用いられている^{8,9,10}。以上より、CES-D 得点を 2 値に分けて分析するモデルは、妥当であると思われる。

ロジスティックモデルによる分析は、まず、目的変数と説明変数の 2 変数の関連性を分析する (単変量分析)。各下位尺度および属性単独の抑うつ症状に対するリスクの大きさを、オッズ比を求めることによって定量的に確認する。しかし、2 変数で有意なリスク要因と確認された因子であっても、本当にその因子がリスクになっているとは限らない。他の因子を介して抑うつ症状に影響を及ぼしている可能性や互いに影響しあっている可能性もある。従って、リスク因子を評価するために通常、2 変数間のオッズ比 (これを調整しないオッズ比、あるいは粗オッズ比と呼ぶ) を求め、その上で多変量分析をすることによって、調整したオッズ比

(これをオッズ比と呼ぶ) を計算する¹¹⁾。本調査の分析でも、2 変数を分析する単変量分析を行った上で、多変量ロジスティック回帰分析を行った。抑うつ症状の人数が少なかったため学年別に分析せず 1、2 年生と 3、4 年生をまとめてそれぞれについて分析した。説明変数には属性として入学年度、性別、所属を加えた。年齢については、ほとんど同じであるうえ (Table 1)、CES-D 得点および職業未決定尺度の下位尺度と相関関係はなかったため分析から除外した。所属は船員養成カリキュラムのある船員系とそうではない工学系に分類した。さらに同様に 1、2 年生と 3、4 年生において、抑うつ症状の有無と職業未決定タイプとの関連性を、学年別に χ^2 検定で分析した。統計処理は SPSS version 15.0J を使用した。

第三章 結果

1. 職業未決定尺度の学年別傾向

職業未決定尺度の得点を Table 2 に示した。職業未決定下位尺度について学年間で差を検討した結果、「未熟」(Immaturity)、「猶予」(Moratorium)、「模索」(Exploration)、「決定」(Decision) は 4 年生が他学年と比べて有意に変化を示した。すなわち、「未熟」(Immaturity)、「猶予」(Moratorium)、「模索」(Exploration) は 4 年生で低下し、「決定」(Decision) は 4 年生で上昇した。「安直」(Easiness) は 4 年生が 2 年生、3 年生に比べて低かった。「混乱」(Confusion) は 1 年生に比べて 2 年生、3 年生が高く、2 年生、3 年生に比べると 4 年生が高かった。1 年生と 4 年生では差はなかった。

学年別の職業未決定タイプの人数を Table 3 に示した。学年と職業未決定タイプの間には有意な関連が見られた。未熟 (Immaturity) タイプ、猶予 (Moratorium) タイプ、模

索 (Exploration) タイプ、安直 (Easiness) タイプの割合は1年生より4年生で減少し、決定 (Decision) タイプは増加していた。混乱 (Confusion) タイプの割合は1年生より2年生で増え、その後緩やかな減少を示したが大きくは変わらず、1年生に比べ4年生になっても減少を示さなかった。

2. 抑うつ症状と職業未決定尺度との関連

1、2年生と3、4年生に分けて、目的変数を抑うつ症状の有無とし、説明変数に性別、所属、入学年度および職業未決定尺度の下位尺度得点を投入した単変量解析 (Univariate

Table 2 Six subscales scores of Vocational Indecision Scale in each school grade

	Freshmen		Sophomores		Juniors		Seniors		Mann-Whitney test ($p < 0.0125$)
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
Immaturity	11.2	3.27	11.5	3.27	11.2	3.32	9.77	3.21	Seniors < Freshmen, Sophomores & Juniors
Confusion	13.7	3.31	14.5	3.55	14.6	3.56	13.3	3.65	Freshmen < Sophomores & Juniors, Seniors < Sophomores & Juniors
Moratorium	10.5	2.93	11.0	3.08	10.5	2.90	9.50	2.81	Seniors < Freshmen, Sophomores & Juniors
Exploration	13.7	2.83	13.6	2.65	13.2	2.57	11.1	2.76	Seniors < Freshmen, Sophomores & Juniors
Easiness	11.5	2.65	11.7	2.61	12.1	2.64	11.1	2.82	Seniors < Sophomores & Juniors
Decision	7.71	2.21	7.39	2.17	7.51	2.18	9.06	2.29	Freshmen, Sophomores & Juniors < Seniors

Table 3 Number of six subtype of vocational indecision in each school grade

School grade	Subtype of vocational indecision					
	Immaturity (%)	Confusion (%)	Moratorium (%)	Exploration (%)	Easiness (%)	Decision (%)
1 (n=254)	26 (10.2)	20 (7.8) ^a	37 (14.6)	74 (29.1) ^b	31 (12.2)	66 (26.0)
2 (n=212)	23 (10.8)	36 (17.0)	41 (19.3) ^b	58 (27.4) ^b	19 (9.0)	35 (16.5) ^a
3 (n=255)	37 (14.5) ^b	43 (16.9)	36 (14.1)	56 (22.0)	35 (13.7)	48 (18.8) ^a
4 (n=260)	14 (5.4) ^a	37 (14.2)	27 (10.4) ^a	18 (6.9) ^a	31 (11.9)	133 (51.2) ^b

$p < 0.001$, χ^2 test. ^aFewer than expected, ^bMore than expected ($p < 0.05$, Residual analysis).

Table 4 Logistic regression analysis of depressive symptoms and the related factors

School grade	Explanatory variables	Categories	Univariate analysis			Multivariate analysis		
			Crude odds ratio	95% CI	p	Odds ratio	95% CI	p
1 & 2	Admission year	2002 (reference)						
		2003	1.15	0.78-1.69	0.478	0.10	0.66-1.51	0.980
	Sex	Female (reference)						
		Male	1.52	0.78-2.96	0.214	1.65	0.81-3.33	0.167
	Curriculum	Sea training (reference)						
		Engineering	1.27	0.86-1.88	0.224	1.24	0.82-1.91	0.322
	Immaturity		1.17***	1.10-1.24	0.000	1.07	0.96-1.19	0.207
	Confusion		1.22***	1.15-1.30	0.000	1.20***	1.12-1.30	0.000
	Moratorium		1.09**	1.024-1.162	0.007	0.99	0.90-1.08	0.798
	Exploration		0.97	0.903-1.038	0.361	0.91*	0.84-0.98	0.017
	Easiness		1.16***	1.07-1.25	0.000	1.02	0.91-1.13	0.74
	Decision		0.9*	0.82-0.98	0.018	1.02	0.90-1.14	0.784
Cox & Snell R^2								0.116
3 & 4	Admission year	2002 (reference)						
		2003	1.27	0.88-1.84	0.197	1.38	0.92-2.07	0.124
	Sex	Female (reference)						
		Male	0.72	0.41-1.29	0.269	0.90	0.48-1.70	0.740
	Curriculum	Sea training (reference)						
		Engineering	1.1	0.76-1.60	0.604	0.69	0.45-1.06	0.094
	Immaturity		1.23***	1.16-1.31	0.000	1.04	0.93-1.15	0.522
	Confusion		1.25***	1.18-1.32	0.000	1.18***	1.09-1.27	0.000
	Moratorium		1.22***	1.15-1.31	0.000	1.11*	1.02-1.22	0.019
	Exploration		1.04	0.98-1.11	0.23	0.93	0.86-1.00	0.062
	Easiness		1.20***	1.12-1.29	0.000	0.99	0.90-1.10	0.910
	Decision		0.79***	0.73-0.86	0.000	0.91	0.81-1.01	0.072
Cox & Snell R^2								0.156

CI : Confidence interval, * : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$

Table 5 Number of subtype of vocational indecision and depressive symptoms

School grade	Depressive symptoms	Subtype of vocational indecision						Total	p
		Immaturity (%)	Confusion (%)	Moratorium (%)	Exploration (%)	Easiness (%)	Decision (%)		
1 & 2	Positive / Total	19 / 49 (38.8)	30 ^b / 56 (53.6)	26 / 78 (33.3)	33 ^a / 132 (25.0)	23 / 50 (46.0)	27 / 101 (26.7)	158 / 466 (33.9)	0.001
3 & 4	Positive / Total	23 / 51 (45.1)	43 ^b / 80 (53.8)	29 ^b / 63 (46.0)	23 / 74 (31.1)	24 / 66 (36.4)	33 ^a / 181 (18.2)	175 / 515 (34.0)	<0.001

χ^2 test, ^a Fewer than expected, ^b More than expected ($p < 0.05$, Residual analysis).

analysis) および多変量ロジスティック回帰分析 (Multivariate analysis) を行った。その結果を Table 4 に示した。単変量解析では、抑うつ症状に対し有意な変数は、1、2 年生では、「未熟」(Immaturity) (粗オッズ比《Crude odds ratio》は 1.17、以下同様)、「混乱」(Confusion) (1.22)、「猶予」(Moratorium) (1.09)、「安直」(Easiness) (1.16)、「決定」(Decision) (0.9) であった。3、4 年生では「未熟」(Immaturity) (1.23)、「混乱」(Confusion) (1.25)、「猶予」(Moratorium) (1.22)、「安直」(Easiness) (1.20)、「決定」(Decision) (0.79) であった。ロジスティック回帰分析では、1、2 年生では「混乱」(Confusion) (オッズ比《Odds ratio》は 1.20、以下同様)、「模索」(Exploration) (0.91) が、3、4 年生では「混乱」(Confusion) (1.18)、「猶予」(Moratorium) (1.11) が有意な変数であった。抑うつ症状と職業未決定タイプの人数を Table 5 に示した。学年と職業未決定タイプの間には、1、2 年生と 3、4 年生においてそれぞれ有意に関連が見られた。1、2 年生では、混乱 (Confusion) タイプに抑うつ症状は 53.6% と多く見られ、模索 (Exploration) タイプに抑うつ症状は 25.0% と少なかった。3、4 年生では、混乱 (Confusion) タイプに抑うつ症状は 53.8%、猶予 (Moratorium) タイプに抑うつ症状は 46.0% と多く見られ、決定 (Decision) タイプに抑うつ症状は 18.2% と少なかった。

第四章 考察

1. 職業未決定尺度の学年別傾向

職業未決定尺度は、測定された大学生の職業未決定状態によって、その学生の“自分の確立”度を予測するという目的で作成されている。“自分の確立”度とは、職業決定は自我の確立と密接な関係にあるとの考えから、Erikson の発達段階を参考に下山が作成した、日本人の自我の確立を反映する尺度である¹⁾。職業未決定尺度と“自分の確立”度との関連性が検討された結果、職業決定の混乱や未熟の傾向が強いほど自分の未確立が予想されるのに対し、模索傾向や決定傾向が強いほど自分の確立の進展が予測されるということが示された。「模索」(Exploration) は職業決定に対し積極的な態度を表すものなので、自分がある程度確立されないとそのような気持ちは持てないであろうと推測され、「決定」(Decision) は職業決定によって自分の確立がより一層進展されると思われる。また他の報告¹²⁾では、職

業決定に際して積極的に行動することなくとどまったり回避したりしている状態は、アイデンティティの未確立と関係があるとも指摘されており、「猶予」(Moratorium) と「安直」(Easiness) も自我の未確立と関係している可能性がある。また下山は、職業未決定タイプと“自分の確立”度との関連性も検討した¹⁾。それによれば、最も自分の確立度が低いものは混乱 (Confusion) タイプと未熟 (Immaturity) タイプで、次に低いものは安直 (Easiness) タイプと猶予 (Moratorium) タイプ、そして最も高いものは模索 (Exploration) タイプと決定 (Decision) タイプであった¹⁾。

本調査の職業未決定下位尺度の学年別傾向を見ると、職業未決定状態を示す「未熟」(Immaturity)、「猶予」(Moratorium)、「模索」(Exploration)、および「安直」(Easiness) は 4 年生では 1～3 年生より低下傾向を示し、「決定」(Decision) は 4 年生では 1～3 年生より上昇していた (Table 2)。最終学年の 4 年生では、それまでより上記の未決定因子が低下し「決定」(Decision) が増加するのは自然なことと思われる。しかし、未決定因子の一つである「混乱」(Confusion) は 1 年生と 4 年生の間では差は見られなかった (Table 2)。「混乱」(Confusion) は、前述のように自分の未確立と関連があると報告されている。「混乱」(Confusion) が 1 年生と 4 年生であまり変わらなかった理由の一つには、自分の未確立があまり変わっていないとも考えられる。けれども、「混乱」(Confusion) と同じように自分の未確立と関連があるとされる「未熟」(Immaturity) は、4 年生では 1 年生より低下を示した (Table 2)。この「混乱」(Confusion) と「未熟」(Immaturity) の違いは、“自分の確立”度の下位尺度との関連性の違いによるのかもしれない。下山の報告によれば、“自分の確立”度の下位尺度との関連性では、「混乱」(Confusion) のみ、“自己存在の確実性”と“自己を受容する受容性”の低下を予測させた¹⁾。しかもその“確実性”と“受容性”は青年後期に発達・成長する部分ではないことも報告されている¹⁾。「混乱」(Confusion) が 1 年生に比べ 4 年生で低下しないのは、“自己存在の確実性”の脆弱性や“自己受容”の低さが大学生の時期に発達・成長しにくいことが原因となっている可能性も考えらる。事実このような「混乱」(Confusion) と「未熟」(Immaturity) の違いは、職業未決定タイプの学年別割合にも表れ、未熟 (Immaturity) タイプは 4 年生で減少するのに対し、混乱 (Confusion) タイプは 4 年生でも減少していなかった (Table 3)。

模索 (Exploration) タイプは1年生では29.1%存在していた (Table 3)。本調査は年度初めに行っているため、入学時に既に積極的に進路を模索している学生が29.1%いたことは興味深い。これまで職業未決定尺度の学年別の報告例はなく、他大学と比較はできないため、この割合が現代の大学生の平均的な割合なのか、それとも本学特有の割合なのかは不明である。進路選択モデルを高校生と大学生で比較した研究⁴⁾では、高校1、2年生より大学1、2年生の方が、進路選択自己効力が進路選択行動に大きな影響力を持つことが報告されている。それを本結果に当てはめて考えると、本学のような職業専門性の高い大学を選ぶ際に進路を考えたこと、そしてその結果進学したことによって得られた自己効力が、さらなる進路選択行動に結びつき、模索 (Exploration) タイプとなっている可能性も考えられる。さらに決定 (Decision) タイプも1年生で26.0%存在し、比較的多く感じられる (Table 3)。決定 (Decision) タイプは2、3年生で減少し、4年生で再び増えていたが (Table 3)、これも、職業専門性の高い大学を選択・入学したことが関係しているかもしれない。すなわち、1年生では職業を決定したつもりで入学したが、2～3年生では進路の再考過程に入り、4年生で最終的な進路決定したという解釈もできるのである。今後他大学との比較検討も課題である。

本調査は縦断研究ではないため、個々人の下位尺度得点やタイプの変化は不明である。学年別の下位尺度得点やタイプ数の変化は、あくまで全体の中における変化である。そのことを考慮した上で、職業未決定の下位尺度得点やタイプの人数を全体的な傾向として捉える必要がある。

2. 抑うつ症状と職業未決定尺度との関連

単変量解析結果では、1、2年生も3、4年生も「未熟」(Immaturity)、「混乱」(Confusion)、「猶予」(Moratorium)、および「安直」(Easiness)が抑うつ症状のリスクを高め、「決定」(Decision)が抑うつ症状のリスクを軽減する傾向が見られた ($p<0.05$) (Table 4)。さらに、独立した抑うつ症状のリスク因子を調べるために行った多変量解析のロジスティック回帰分析では、1、2年生と3、4年生に共通した抑うつ症状のリスクを高める変数は「混乱」(Confusion)のみであった ($p<0.001$) (Table 4)。「混乱」(Confusion)は1点増加するごとに、1、2年生では抑うつ症状のリスクを1.20倍、3、4年生では1.18倍にしていた (Table 4)。その他、1、2年生の「模索」(Exploration)が抑うつ症状のリスクを0.91倍にし ($p=0.017$)、3、4年生の「猶予」(Moratorium)が抑うつ症状のリスクを1.11倍にしていた ($p=0.019$) (Table 4)。

前述のように「混乱」(Confusion)は自我の脆弱性と自己受容の低さが予測されている。背景にこのような自己確立の問題があり職業決定に不安・混乱が生じている状態であれば、「混乱」(Confusion)が抑うつ症状のリスクを高めることは十分起こりうると思われる。タイプ別の検討で

も、混乱 (Confusion) タイプには1、2年生でも3、4年生でも抑うつ症状が多く見られ、ロジスティック回帰分析の結果と矛盾しなかった (Table 5)。

「猶予」(Moratorium)は3、4年生の抑うつ症状を高めていた (Table 4)。タイプ別検討でも、3、4年生では猶予 (Moratorium) タイプには抑うつ症状が多く見られた (Table 5)。「猶予」(Moratorium)は「安直」(Easiness)とともに日本特有の職業未決定状態とされている¹⁾。「猶予」(Moratorium)と「安直」(Easiness)は将来の方向性が定まっていけないという点では共通した状態であるが、“自分の確立”度の下位尺度である“自己統制力”との関係の分析では次のような違いが見られている。すなわち安直傾向は、何らかの外的基準に依拠して自己決定をしようとする自己統制力があるのに対し、猶予傾向は、決定を回避しておこうとする統制力の弱さが見られたのである¹⁾。「猶予」(Moratorium)は抑うつ症状のリスクであったが「安直」(Easiness)はそのリスクではなかったことは、自己統制力の弱さが抑うつと関連している可能性も示唆するものとして興味深い。どのように自己統制力の弱さが抑うつと関連するのか、更なる検討が必要であろう。

また「模索」(Exploration)は、1、2年生の抑うつ症状のリスクを軽減していた (Table 4)。タイプ別検討でも、1、2年生における模索 (Exploration) タイプには抑うつ症状は少なかった (Table 5)。1、2年生のうちから職業を積極的に探求する傾向が強い学生には抑うつリスクの低いことが示された。

その他、タイプ別抑うつ症状の分析では、3、4年生では決定 (Decision) タイプに抑うつ症状が少なかった (Table 5)。ロジスティック回帰分析でも3、4年生の「決定」(Decision)は $p=0.072$ でオッズ比0.91と抑うつ症状のリスクを下げる傾向が認められ (Table 4)、タイプ別分析結果との一貫性は保たれていると考えられた。

以上の結果から、「混乱」(Confusion)状態が強い学生および3、4年生の「猶予」(Moratorium)状態の強い学生には抑うつ症状の存在やリスクに注意すべきであると思われる。

なお、4年生260人のタイプ別の抑うつ症状は、未熟 (Immaturity) タイプ14人中9人 (64.3%)、混乱 (Confusion) タイプ37人中20人 (54.1%)、猶予 (Moratorium) タイプ27人中13人 (48.1%)、模索 (Exploration) タイプ18人中3人 (16.7%)、安直 (Easiness) タイプ31人中9人 (29.0%)、および決定 (Decision) タイプ133人中22人 (16.5%)と、混乱 (Confusion)、猶予 (Moratorium) タイプ以外に、未熟 (Immaturity) タイプにも抑うつ症状が多かった。しかし人数が少なく、この結果が本当の傾向なのかは不明である。今後4年生の更なる調査が必要と思われる。

3. 職業未決定者への支援の留意点

抑うつ症状と職業未決定の学年別特徴と留意点をまとめ、職業未決定を主訴として相談に来た学生への対応や就職支援・指導について考察を加える。

学年別職業未決定の下位尺度得点からもわかるように、「決定」(Decision)以外の未決定因子は3年生よりも4年生になって低下していた(Table 2)。本調査は年度初めに行った調査なので、その結果は前年度の変化を反映していると考えられる。したがって4年生における未決定因子の低下は、3年生の変化の表れということもできる。3年生になり、いよいよ就職活動が始まると、自分の職業決定に対し真剣かつ積極的に取り組まざるを得なくなる。その過程で、学生の自我が成長し、自我の未確立と関連のある「未熟」(Immaturity)や「混乱」(Confusion)の得点が低下すると推測する。また安易な職業選択意識を示す「安直」(Easiness)や職業の決定の延期を意味する「猶予」(Moratorium)なども、通常3年生ともなれば、程度の差こそあれ、徐々に払拭されていく。そうして全体としての職業未決定因子の得点は低下していくのであろうと考えられる。しかし「混乱」(Confusion)は、3年生よりも4年生で低下を示したものの、1年生と4年生では変わっていなかった(Table 2)。タイプ別に見ても混乱(Confusion)タイプの学年内における割合は1年生では少ないものの2年生で増え以後は大きく変わらなかった(Table 3)。これらの結果から、「混乱」(Confusion)状態は、大学で進路を決定する過程によって解消されにくいことが示唆された。しかもロジスティック回帰分析の結果から、「混乱」(Confusion)はそれ自身が他の職業未決定因子や属性に関係なく、抑うつ症状の発生を増加させることが示された(Table 4)。つまり「混乱」(Confusion)傾向は、その存在自体も、抑うつ症状との関連性も、学年に関係なく認められることが明らかになったのである。このように「混乱」(Confusion)は、学生自身では解決困難な問題で、その上抑うつ症状のリスクとなるという注意すべき状態である。「混乱」(Confusion)傾向の改善には時間がかかる可能性があり、早い学年からの支援が望ましい。そして精神健康度の低下にも、特に注意を払いながら支援を行う必要があるだろう。

3、4年生においては、「混乱」(Confusion)に加えて「猶予」(Moratorium)も抑うつ症状の発生を増加させていた(Table 4)。「猶予」(Moratorium)の学年別変化を見ると、4年生では1～3年生より低下を示し(Table 2)、タイプ別でも猶予(Moratorium)タイプの割合は4年生で低下を示した(Table 3)。つまり「猶予」(Moratorium)傾向は、全体としての点数(Table 2)やそのタイプの人数(Table 3)を見ると、4年生になれば改善されているように見える。しかし抑うつ症状のリスクであることが示されたので、その状態に注意が必要である。

これらをまとめると、職業未決定者、特に3、4年生の支

援の際には「混乱」(Confusion)や「猶予」(Moratorium)の程度を考慮し、それらの傾向が強ければその背景に抑うつ等の精神健康度の低下がないかを検討する必要があると考える。職業未決定者に、もし抑うつ症状などの精神健康度の低下があれば、その学生は職業未決定問題に取り組むことも困難と思われる。さらに精神健康度の低下の程度が強くなれば、学業や大学生活にも困難を来す可能性もある。できるだけ早期に精神健康度を見極め、精神健康度の低下があるならその治療を優先しながら、自我あるいは職業未決定の問題の改善に努めることが大切であろう。

以上より、将来の方向性が定まっていない学生への支援は、抑うつ症状の存在の可能性に常に留意しておくことが勧められる。前にも述べたが、職業未決定尺度は、臨床使用できるように自分の確立度を評価できるように作成されている。未熟や混乱傾向が強い場合には、自分の確立度が非常に低いことが予想されるので、職業未決定を話題にするよりも自分の未確立の問題に焦点を絞り、自我の成長を促すということが必要と提言されている¹⁾。しかしそれに加えて、混乱傾向が強ければ精神健康度のチェックも行い、必要に応じて薬物療法を加えながら、本人とのカウンセリングを行うことが望ましい。またそれはキャリア教育・指導においても同様である。精神健康度の低下に注意しながら、個々の学生のタイプを見極め指導することが、効果的な指導につながるものと考えられる。

本研究では対象者の欠落が多く、縦断的な分析には向かなかった。今後調査方法を工夫し、個々の学生の精神健康度と職業意識の関わりの変化を縦断的に検討する必要がある。さらに他大学との比較も今後の課題である。また職業決定には、家族要因^{13, 14)}、性格要因¹²⁾、子供時代からの職業選択の形成要因¹⁵⁾などが関与すると報告されている。それら要因と精神健康度との関係も明らかにしていくことも今後の課題と思われる。

謝辞

本研究を進めるにあたり、励まして頂いた東京医科歯科大学大学院心療・緩和医療学分野の小林未果先生に心より御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 下山晴彦. 大学生の職業未決定の研究. 教育心理学研究 1986; 34: 20-30
- 2) 松尾雄毅, 佐野秀樹. 職業未決定の種類と処遇—アメリカと日本における研究の概観—. 東京学芸大学紀要第一部門 1993; 44: 273-286
- 3) 浦上昌則. 進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連. 教育心理学研究 1993; 41: 358-364
- 4) 富永美佐子. 進路選択能力および進路選択自己効力が進路選択行動に与える影響—高校生・大学生の発達差の検討—. 東北大学大学院教育学研究科研究年報 2008; 56(2): 163-177
- 5) 安達智子. 大学生の進路発達過程—社会・認知的進路理論から

- の検討一. 教育心理学研究 2001 ; 49 : 326-336
- 6) 萩原俊彦, 櫻井茂男. “やりたいこと探し”の動機における自己決定性の検討—進路不決断に及ぼす影響の観点から—. 教育心理学研究 2008 ; 56 : 1-13
- 7) 島 悟, 鹿野達男, 北村俊則, 浅井昌弘. 新しい抑うつ性自己評価尺度について. 精神医学 1985 ; 27(6) : 717-723
- 8) 小林幸太, 小林玲子, 久保清香, 園田智子, 森 満. 抑うつ症状とその関連要因についての検討—北海道内の一短期大学における調査から. 日本公衆衛生雑誌 2005 ; 52(1) : 55-65
- 9) 吉岡英治, 西條泰明, 福井知範. 事務系職員における労働時間、VDT 作業時間と抑うつ症状との関連. 産業衛生学雑誌 2006 ; 48 : 687
- 10) 岡田栄作, 室谷健太, 蒲原龍, 花澤佳代, 志渡晃一. 精神保健福祉士の抑うつ症状とその関連要因. 社会医学研究 2009 ; 27(1) : 17-24
- 11) 浜田知久馬. オッズ比とロジスティック回帰入門. 「学会・論文発表のための統計学」 真興交易医書出版部, 東京. 1999 ; 136-165
- 12) 松原由枝, 西村知香. ソンディ・テストを用いた職業未決定の性格要因に関する研究—アイデンティティとの関連で—. 川村学園女子大学研究紀要 2007 ; 18(1) : 141-162
- 13) 高橋 彩. 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連. パーソナリティ研究 2008 ; 16(2) : 159-170
- 14) 高橋 彩. 女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連. パーソナリティ研究 2009 ; 17(2) : 208-219
- 15) 武衛孝雄. 職業選択における形成要因の出現過程—児童期から青年後期までの縦断的発達研究—. 島根女子短期大学紀要 1969 ; 7 : 19-31

大学生の抑うつ症状と職業未決定尺度の学年別検討

福田 直子^{*1}・朝倉 隆司^{*2}・伊野宮 興志^{*3}・小室 理恵子^{*1}・脇坂 喜代美^{*1}

（^{*1} 東京海洋大学保健管理センター
^{*2} 東京学芸大学教育学部養護教育講座
^{*3} 東日本郵政株式会社新東京郵政健康管理センター）

要旨： 抑うつ症状と職業未決定尺度との関連性を学年別に検討するため、2002年度と2003年度に入学した旧東京商船大学生を対象に1～4年生まで質問紙調査を行った。1年生254人（女24人）、2年生212人（女26人）、3年生255人（女29人）、4年生260人（女25人）を分析した。職業未決定尺度の下位尺度では未熟、混乱、猶予、模索、安直が4年生で低下し、決定が4年生で増加していた（ χ^2 検定）。またCenter for Epidemiologic Studies Depression Scaleの日本語版で測定した抑うつ症状の有無を目的変数、職業未決定下位尺度を説明変数としたロジスティック回帰分析を行った結果、混乱が全学年で、3、4年生では猶予が抑うつ発生を増加させた。模索は1、2年生の抑うつ発生を低下させた。以上より、抑うつ症状の発症は、混乱、猶予の傾向の強さ、模索の傾向の弱さに影響を受けることが示唆された。

キーワード： 抑うつ, Center for Epidemiologic Studies Depression Scale, 職業未決定尺度, ロジスティック回帰分析, 大学生